

安位寺殿御日記

六十九

内閣文庫	
番號	和 20909
冊數	82(71)
函號	古 19 359

書文古
一九
三五九
號

安位寺殿御日記



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak 2007 TM: Kodak



武曼宣

國學

卷之三

古語

昔々古來鑄鑄多々站々批々爛瑞々又文獻實錄卷六十四=薄々定
正藏源流卷大半宣大器寶顯同此國盛々然々一々舊事瑞々
昭武曰昭武宣寶顯母甚國盛々又璽々志賈高穴據傳倫世史良國盛々區母指呆立命人
昭母曰昭武宣寶顯母甚國盛々然々一々舊事瑞々

卷之三

昔々國巒五人立土脊宣千畠禰呂鍵代翁正立不懲ハトナ當御ノ國

國書

通鑑卷一百一十五

感
日本圖

上卷

子半癸卯正月壬午安二丑火

卷之三

卷之二十一

通鑑卷一百一十一

卷之二

卷之三

合信金有計萬三千才百才六圓五合人鑿水頭

金匱要略 卷之二十一

國朝詩正義

正音少俗四圓六餘編
特謝釋百四圓次俗編
正音少俗五圓立餘編
正音少俗三餘六圓四俗編

四合六面方倍角三倍六圆四倍角四倍

卷二

72

三十六

水圓岱八錢八厘 車銜三百四岱子圓五岱正錢 水車鑄百三岱
鑄金外庫係寶圓 八青珠鑄百正岱水圓六岱錢 鑄金子百青岱
岱寶圓水岱錢四厘 岱圓鑄百八岱四圓 壴行馬百水岱
馬六圓 帕幣馬有岱圓 鑄娘鑄友百友岱水圓正岱錢 一市基馬正
三岱水圓岱友錢正厘 鑄鑄漸人錢太岱八圓真岱正錢 鑄人歸岱
岱八圓友岱正錢 重鑄人錢三百三岱壹圓水岱八錢 鑄鑄潤通鑄
鑄鑄金子千十岱正圓有岱四錢十厘 薦五百六岱圓 薦五百五
營業鑄金子千煩岱圓十岱正錢正錢 工業鑄千五百四岱三圓
商業鑄正千四百十岱子圓子岱
可選購金八千三百十岱六圓岱正錢

卷之三

金岱六萬三千八岱加廿餘六頭

寶源金四百大圓合三錢
寶源銀一百正條三圓四錢

71-3
庭仁二季卯月 日

同月廿日改次

文明

高齋
寺藏經記

序



三月三十日

庚午三月三日丙午刻之辰寅
要事
四時之方ゆきよよかよ御立を
五事とけ赤三本あらりしに一者と
仰せわね記一物と三よりわ方々さゆ
土事人清ひ以下中平すええん作
並じて下下付札はどくす付下
土事めをいの余めふつむい付

及八角高殿を事力花火おひ不相
恵まみゆ御神田印をゆうじ印同
其日立會

初習
正房

千徳万福幸甚！

四目

吉野村家事
松井家事
官下印前門市行も三清

底、二三事も三月也日雨也利上壁上
事多々有りま事勢もすり亦
力有り事多々方ゆくよきあゆも立毛
五事を汰キニ有りしに一者と
いもわね記されと三者もあゆも立毛
上事も清江以下中件)えこ欠能
免。もし主下信札以てどぞ幸便下
主事めをいの余金もおてひや能事

及八句二事餘事中力甚也方候不初
意事まゆれ御傳此中もゆく利同
者自事事上事

和歌小

習し節

千德万福幸甚、

冒解

主事利事の難事立事事事事
事事事事事事事事事事事事事事事事

道も兄弟しやうわくゆ也承認申也云
主あるこそすと有様あれ宣奉事も汝
等いへす主朝が非革の御と聞かん人
もか是れゆりき之を聞るも仰ひ
私病具食所モ極ニ力烈熱中多苦
及ひぬま可れ實也沙翁之詩
讀文宗一宣印教左工作之江口
江口紫雲一言にて印鑄事務署
自二赤

以少人小西下事や社之里工

盲

座

主三席中改更之宿主座而主と此

吉

主

大也と在る

一清萬葉集の成所故事相傳名主
主とて修能火門と付員代主と行傳

自二赤

金

萬物之生也。少者有也。多者無也。

卷之二

九日五二節

今朝の心事は、
只見の風景に、
心を惹かれて、
身も心も、

古文

西國の神は也かと云ふ事無
難い事と云ふ事と云ふ事
又宣せよされど四也云々也あらう
致仕在所事有不通用と云ふ事也

一三藩作乱時國庫空虛向來有積怨在心
人多有私行藩方之子也人主深
於是曰陛下亦知之者非止事之而即
之又曰此固當

卷之三

一
王
南
謂
其
法
高
妙
究
竟
無
能
師
究
竟
無
能
師
究
竟
無
能
師

おまへ心がなまらばあ事に活か
71.8

物語にあきせんが

一 楊州 海西五天寺力利傳利本作行
祐之源祐達 宗下原市吉藏也

一 おのれ本寺力利傳井三佐
取手平相済聞書をとすとおもひて
取手寺所信三佐より相手以人書
おのれの方性をあひて書くとおもひて
例め行承此をよしとおもひて書くと
わざうわざれどとぞとわざうわざ
とおもひて書くとおもひて書くと

一 楊州源祐達 宗下原市吉藏也

中

一 楊州源祐達 宗下原市吉藏也
志林院行く多羅利傳立也此も
毛豆子也之行 来御の事多より
毛豆子也之行 来御の事多より

四四下

終

日野山

一
之傳
即事

宋文師
宋東之師

卷之三

里下にレバナリヤニヤハナタマシ
難ミモリ取リテナシテナシテ
落シシテナシテナシテナシテ

竹書の古事記ある事と傳承の源流を考
えれば、其の本來の趣旨は、以テ相之也ヤ

石也云。今御事の所とが御前より。され
て御主は御付とも。お早めに。この御

所識多非其人。惟是子房之
才，實獨出其上。故其後雖有
數十輩，皆不逮也。

かを務も一方一月の事とす。其の後は御
車の如きは酒の如くも多めに用ひて

今よりは西行の事
あはれてかのやうに

久海國トシ前

一 腹内拂拂 ハラシテ 薬堂草堂氣

三 仙鶴房 ミツバ

一 三保斎乘子 ミヤタケ 沢元敬

一 布江在室 ヒルシナシ 朝雲天香方敬
モハヨウス

一 桂弓南風 カツクニ 東山のゆうじ

賀代主 カタシマ 古事記述 コトノハジメ

毛毛鬼吹拂 モモモミツバフ

吉日西

圓月代主 カツクニ 二千才也 ニチサヘ 作 ハセ と
古事記述 コトノハジメ 事記述 コトノハジメ と
能手 ノウシテ 玄源 コンソウ

一 トヨタチ トヨタチ 有田 アリタ 西壁 シキ 有田 アリタ 有田 アリタ
有田 アリタ 有田 アリタ 有田 アリタ 有田 アリタ 有田 アリタ 有田 アリタ 有田 アリタ
今 イマ

卷之二

71
11

10

今朝其間が事務極と云ひ
御之元御跡は御用代東洋江那
信重の事也御

りは見であれどもあらそ
れぞれにあらう相頃をも
と泥宿後せゆゑを重き陽室に
あらわるは其様あやけあらそ
れと書出

一土篤方事畢後行至山中也
一宿中止於竹林中上繩索
一宿中止於竹林中上繩索

一
初望之
或若「山」
而其後
乃「山」也

南日弋波王兄

71
12

6

仰聞此甚為之喜
而公亦復何能仰止
其後又與子雲結師
業於門下數年之後
乃歸

一金買へ仕事事へ詰まう三千日の節
りまく有る事多き也私共の事も行
往來は行々御手あてノ印を付さぬう
云ひ申す事御用事も好いと自毛所

71
13

11

10

卷之三

前後相承する事無く、お風化人極一等也

者已述其事

支海
一雨日之任郵者，其多也。中不意

江漢集

一子目代補任
ゆり半之郎は爲
ゆる二枚三と四三
高柳の助より雨季三
伊藤士トウ

一
雨
中
行
物
中
余
方

71
14

二

る御用事わざこむかくゆけり
言ふ事無し

一 佐井又人から住まひにゆけり
吉日未申の日ち第角身

しや院院は連月居つて、院中院
酒。アヌトム、あまの夫の能作
じを事わきに仕し。今ノ所ト方
物もまことに、いえが、おうと
ひす。おれや、今之、三日室霧
あむして、城ノ門を守り、く
竹の竹をもせん。而む之三日
后、お部屋を前、身を絶つたりト
地守りに入りし後、身を守り即
りお宿ゆきを初め、また日暮れ
ままで、身を守りて、身を守り
也。

一 りせ十日市人よりみことの元

71
16

三

仰仰吾子之風也。由也之清也。
古所傳之風也。予也之清也。江郎子也。
有目代佳節也。不亦可乎。丁未年
仲夏之吉。陽氣生赤也。之春也。其
吉。老子之師。送。因。其。而。行。
涉。人。街。之。又。而。多。之。而。能。暮
福。三。之。是。而。也。也。而。而。之。而。
沾。血。和。以。之。久。難。也。有。也。
予。之。所。但。有。相。而。相。而。之。而。
一。老。而。也。也。而。而。而。而。而。
大。自。王。年。而。
大。自。王。年。而。
一。母。女。之。而。也。也。也。也。
一。明。金。之。而。也。也。也。也。也。
予。之。之。之。之。之。之。之。

右目之用事

71 18

11

高瀧山中と別々金井宿を出る
上り坐今車一ツ三つ又の四精
三湯並と此ヲ御ひに或リ西一里を
まく坐三屋の足りる所れも此所
あらうと見ゆる所也

一は御馬車の貨代日をかててゆゆ
支えを取る所のアマサヤアヤセ
此日序より此等物を此處に用ひて
其は行方とも江戸廻り三番
二アマサヤアヤセ四アマサヤアヤセ
想ふ上を付して此の事は必ずアヤセ
一貨代費の事案本代を乞ひ聞け
一事あがめて是因にこの消息序
れかアマサヤアヤセ五アヤセ
初在在下仰きあす血やあきとも
一寒食も一主因れあらあさのせ
士三番山を控ひて之都も

71
19

三

一法門爲主。又以以下四字爲得。因代
此行。於此詮。方能得其真。而妙者。
亦所不外也。如是。

卷之三

廿四史

首
卷

聖南傳志と傳述室供語通法華宗
卷

句解卷之例

おひ生の事は向う今度三部
長吉宣請取事以古ト付多大方も
が種院作請取智作翁上四
わ以之事名はばく事室三種假
在ニ種院請取事三部
其事宣請取事江戸之種院事
乃て傍ノ事曰く而御住高方三層
其事宣請取事江戸之種院事
作合

而第前書れは爲誰事在事古源
苦麻子事は近御仰市以御仰那家事
言事事事事事事事事事事事事事事
注聞りて方事事事事事事事事事事事

万葉集

71
21

10

市連至中年行住無事。自謂
矣。如某年秋入小向派下。詔
願之。市連宿禰村。土連到主不見。主請
入幕。並雨。因。余丈竹。和。人取。主室
向。考。有。社。方。書。三。拜。主。更。和。有。種。更。之。
刊。官。書。仰。其。原。崇。年。祀。云。
平。而。既。之。以。入。幕。初。三。拜。也。才。二。月。同
。あ。ナ。三。方。同。歸。ト。文。
長。主。之。請。而。上。名。付。第。村。主。下。送。而。而。
來。手。す。あ。刊。古。源。書。役。文。全。而。而。書。主。之。
め。え。入。幕。前。臺。ま。ち。ル。力。か。不。い。事。大
幅。公。不。即。印。數。布。代。三。達。古。書。方。三。達。公
三。五。字。を。出。下。之。今。か。の。只。乘。而。而。不。ほ
正。も。ね。と。一。狀。三。得。不。主。書。出。お。當。公
一。狀。う。あ。三。達。と。
一。狀。う。あ。三。達。と。
一。狀。う。あ。三。達。と。

一 おまかせ事多々ある所より及
門付の落松を多く植て、
架木の下にりて書ふとく便
用あり

一 小窓ノあ戸の出来より三段板生轍
戸頭二面之を裏方左下に置き行
一 箱もと

サ 目西子舟

サ 勝り屋七助

一 おの肩身たゞおゆする日と大有



サ 内閣



サ 内閣

一 お金背や 補ふよと國じんちが
お國じよと國じよの宮廟りよ

和補金背
一二のわう物也

事多々あるしめ物をとく

四月廿九

右主とて済す

み
酒
主
事

71
23

11

一九三〇年五月一日
向日野あゆ子

幸精空海住持嘗於牧羊寺領悟
而作佛祐寺多有其跡也。行
也所至多有石碑記之。其碑文
皆以妙法名之。有碑曰。此是
妙法。妙法。妙法。妙法。妙法。
而後主之碑。碑文曰。此是妙法。
同上。碑二。後主。妙法。中

初稿本
印行本

卷之八

卷之三

7.24

22

ト御心申候て後事可也と
おはづくは行方申候
一 売事御用承多額と相交りも重
多額初方且申御候て、まづまゆ
日宣大和を。神也アキ内侍
異内申候事也。御事も早ち。官祝
事又ノ是難半昇。而一再セキシムヒ
お振動。成也。而申候事也。御
福多キモナリ。布惠。又布惠。御
之文九而切とさみの御事也。御
西書。御申候事。御事。御事。御事。
某形人也。

一 あり。おわねとやうと。おもと。おもと

廿日。八寅。年下

御歳旦の御

一 は。本。寺。身。二。か。り。や。か。え。と。を
送。元。社。出。身。申。ヤ。か。れ。し。と。相。接。れ
る。所。也。三。川。の。寺。本。寺。作。社。身。也。

一
高木不至めらあめりアラサエシテ
育財ちやり司以酒アラマヒシテ歎
トヨリ主翁を起コススレ句作酒席
ニキトの多シ忙丁て仰モと云
一
猪野方以アキモトセイナリ司方アカニと
之ほて仰申ト有ラ
一
佐野陽長アキモトヨウジアホ園主アホ
トモ多喜多雲室神佐わと云
仰モチヤウ酒席アホ

サ自己ヤ。

王滿子舉アマタツシテ酒アラマヒシテ主翁アホ會
チニタヌル也
一
因西アキニもあぬアヌキミキモセキリ主坐アホシテ
下付アシタフセシ酒アラマヒシテ

世翁庄辰アホ井

かくか哥種アホ心ハコ佛ボク主能語アホ而
は化アハ也

一
カアれ程アホシテ酒アラマヒシテ主翁アホ松雲アホ
東波比院アホ高麗アホ利アホわにあらむ酒アラマヒ

自是意下少少極一根未觸者人固云
れ不以之也

一時所院有賣酒匠此之言曰祐之向れ
往大都石以次極一板圓至一村中也亦
やと酒主より酒ありて就中一樽
湯す一わびすお拂りすある事すと
思ひても清酒は禱月半二館事そ
乃起下向社へ湯往す下せすあ

席

一夕向社て宿庭下に立むけりとれ
清聲大口且小豆ゆくよめ花一枝と
松是主と酒主圓向極一板圓事
高堂盡も花枝前人一樽手湯拂わづ
き。伊と玄教調ひ次許玄圓も云
高仰仰而詣拂之
印之社系名医清人。之醫學之
終上本圖ノ人。作字焉

苦

印之社系名医清人。之醫學之
終上本圖ノ人。作字焉

一主同云ありすと考る事多矣と云ふ
御報官詔言延之以時近より行將爲
軍事也と不滿をも以て事も其處行
ゆる事も所持するを爲す事多矣と云
しも御以相送りあらゆる事
一主育代江わを改め申相送り

廿八主年序

是先んせて元主教大者手写

一主は既に相送り

一主少院正室清ひに垂立相向奉りま
え相送り主事相送り内侍御切引取主事
れども主事之難苦口マヤアリテ主事
ウタキサヘ引キ主事と主事在左主事
ト主事味思行一主相送り御沙汰仕わ
れ御沙汰主事御沙汰也三事主事と主事
主事主事主事御沙汰も主事御沙汰
之相立らるゝ事相送り主事御沙汰
主事主事御沙汰主事御沙汰主事御沙汰
主事主事御沙汰主事御沙汰主事御沙汰
主事主事御沙汰主事御沙汰主事御沙汰

叶せうれねがくすすりまゆ
ゆづるよソトシ書ひてひるわゆ
之ニ也ノササギサドモ
一 いはむ事高四十ヨリセカイアシ
シテキムルもアリ云作付
ひと二里下人有志の御事とお前方
因名スルニ云作所をひれ
九日立木原 上社而下
三事事字ノ書セテアシ
カタレミ極一ノハニ品清
此方ニカレ
一 以て事ある所トドリニキニ
セテアシ
也第仰ト仰リ西日本全地而わゆ
其事ひき落沙て仰セテ事多
よりす四 事事字ノ書セテアシ
シテ
一 未も以治未治而トハナ國四國之名
也辛亥年一二月上セテニ西シト出
之見力石子和之
同井ノ氣い筋地亦地ト安住れ
植ニシテ高野れ死相立れ物主の男
此事無事也
文往來上吉拉一ノ高野而西向三面也
空也
一 仰ロササギ
付氣清壁付ト本端也
付氣主御事也
付氣主御事也

安
治國當以
德行而
不以爲

卷之三

禮記圖說卷之三

71
29

M

初因軍事之故
子雲乃向營廬

千德力行者也

一句海向二方前例
善賢之命令于君
三事合約ん千萬事も
之は元准海向

國朝詩

于多以詒

一
事莫作他種類。若作他種類。
未以爲你行矣。不善處中多矣。

一
古
希

一
海
經

首
卷之三

前事嘗て嘗て嘗て
音候相合えず事跡りと滋乳の聲
ふくの前形はれゆめえとちかくて
是大にりるに作事はく語る乃三詩と
中洞を堅てゆわりゆくとてとくと
ゆ里をす中物ゆる事も行はれりと
さかゆじとくらうされと用とすとゆ
まこと二事とそとすとすと
が山間見ゆる所れりゆくと
勢いゆる地とゆき方めんと仰
手書於西山也と年所望也

一 茶御内藏。以之爲名。方欲
計。也。傳。是。初。號。軍。甲。
合。事。未。往。也。

二 目而歌。并

古。臣。主。事。無。憂。病。了。口。節。方。れ。や。と。
司。事。之。多。活。安。在。不。休。幻。石。と。一。心。皆。
上。白。也。增。也。半。痛。生。之。官。引。
一。望。有。有。之。正。半。之。半。之。半。之。半。
半。半。之。半。之。半。之。半。之。半。之。半。之。半。
上。右。向。也。半。痛。生。之。官。引。

一。重。宣。上。所。用。自。也。因。腹。因。之。之。
之。之。物。中。之。一。三。事。也。之。而。更。之。半。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
以。以。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
一。自。書。說。由。事。と。

四。冒。丁。前。序。

一。勅。付。于。奉。昌。齋。道。員。之。年。三。年。年。
用。之。一。連。三。行。印。印。之。之。首。寺。廟。門。十。也。
ト。行。院。之。不。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
ト。行。院。之。不。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
事。有。人。日。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
方。也。食。殿。公。御。此。也。之。之。之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

お前こそ止むる所と封を解きゆく事無く
お主の御心事も

指揮不事也。事事務本而得之。固
無以也。其一也。其二也。亦惟往初
始也。其三也。初近微也。其四也。謂之
至也。其五也。近微也。其六也。是其七也。
事事務本而得之。固無以也。其一也。其二也。
亦惟往初始也。其三也。初近微也。其四也。謂之
至也。其五也。近微也。其六也。是其七也。
事事務本而得之。固無以也。其一也。其二也。
亦惟往初始也。其三也。初近微也。其四也。謂之
至也。其五也。近微也。其六也。是其七也。

71
33

三

卷之三

七日有空次第上

日暮のあはれのやうに
風の匂ひもすこしあり
そよそよと風が吹く
あはれのやうに

卷之三

一
古事記下
二
三

九月廿二日
行後行草書

九月之辰
壬午

後醍醐天皇
御文庫成書
大嘗造御上而反御印與之
下ト上之
一
甲子御在御太主也之爲御
中ノト亦以節御之作一毛之聲
云之五石爲之
一
古向え有内來以世力爲之體
莫之能知
十日之色
元氣也
而御之多至多患而十日之

一 車を東西と見ゆて西の方へ

一 久角内人所二元

一 大勢即子安筆の歌二和歌
一 壬生寺院の歌と文官すらてはる

一 朝日と夕方進

一 晩著茶御

一 朝日と夕方

一 五三の物語と物語と物語
一 方有氣歌ありと有氣歌と有氣歌と

一 三百四半

一 五百四十

一 佐藤子房の歌と因み方往れ女達

一 佐藤子房の歌と因み方往れ女達

一 佐藤子房の歌と因み方往れ女達

一 佐藤子房の歌と因み方往れ女達

一 五百四十

71
35

卷之三

卷之二十一

士
同
己
之

宣和丙午秋九月
同舍人李公樞
侍郎入對事
御前奏事
至有布言也
極其人丈
方子
次向者以院
兵初作開夕
中庭之日
御前奏事
門外之日
亦多被召
內閣

毛國慶子序

71
199

四

一寺のまづ地ね中はほんとだらうるる
ひやくはるに見ゆるりあらば源やめに三五
わゆるて開き、いよゆるあをそむくち
出でぬまよしと開けらるあをそむくれ
ナリ波形をす工事、りいテ玄作
とく家物をうちみすよ。市りえきゆれ
湯行役はれりせり下はる山田の御
とゆとおれどもすすんで

七日正月
柏原以心事
往來の事
あらわす
心事の事
もあらわす
むすめ
てうり年と
一年の事
きく方をも
いふ事と
一
いふ事と

日正辰
ぬる西山に此の宿之あ上野の宿
竹青の宿わくはゆきはるか
とすと金と
山の里と能

71
37

23

久保田二郎
正門と申す
お前は如何ぞ
おまえの如き
おまえの如き

卷之三

卷之三

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

卷之二

志日丁未ノ夜

地獄五刃の御 大事店の四郎也

生居て、わ生り是の御に 萩原
死人えひゆはくすくも 感情高ひ云ひ
石作玉作富吉とまちとすとおとせ
サニ向う彷徨と すままでけり行ひ
此身は死に可也」と

了る間三りやれと志士天仰ひまか
日本人人第一の因天作合より御食事
候じ事上手

其日代申 辛

ト之程まほすと幸運を以て空とて上井
三度すあゆねりあらかじめ 里と一石不食
ねえ板上とて 伊豆山とて 一石すあらかじ
めや たゞと、此處にりも作物りてを
ゆきゆきと

其日酉再

在拂者手移尼島口向進主候詔酒は紫
一 まつまつとあゆり移院せりと移出を
し吊橋生繋ぎとて がま事 すつ事中 間室
向島方と所移申因ゆく事主を以て井戸大
之を拂ひ申上主方を用意すと注文と

71
,
39

3
7

惟五毛之子望其

江漢之風氣也。故其文章雄
深富麗，有子雲、長安之風。
老因度所存

卷之三

事自古有之幸也未深究耳但自古而一主而
善者少也豈不以爲可悲哉

進止元主之元主也人主平反易
一就補以之由附名中也以之為長者之枉子而

古事記傳
卷之三

益前守はとて御名を承り御内侍御
の事少人也。左近御内侍御の事少人也。

御内事三面書送り。もとうへ
身うちあくま所。北の高麗。南の
朝鮮。北の日本。

事の事ありてやうやうりあらじ
ひりそよはれりて上をす。やゆもとくま
難にすましを一書と申行。所が
りゆれど一書も。不思議に
ひろひろと中をす。ひらひらと
まづまづと。庄向で移り行り。不思議

71
40

三

相一派初鑿之日以鉛石方圓五尺有
分外加高一尺有奇其上置一石碑
題曰「龍虎山真武祖庭」其碑文
甚為贊美其碑後有石室深丈餘
廣三尺余高一丈余中置一石
函函中藏丹書其上題曰「真武
祖庭」其碑前有石碑一通
題曰「龍虎山真武祖庭」其碑文
甚為贊美其碑後有石室深丈餘
廣三尺余高一丈余中置一石
函函中藏丹書其上題曰「真武
祖庭」

六月
初日壬午

一古事記卷一
作紀元中
一古事記卷一
古事記卷一

物事あらゆ
事發はてりに國人印し
て日是れ所をかく
ひの事はる。徳高き方氣
立意す。徳高き方氣
修業す。慕ひ仰ぎ下さる
難事也。心地もあらう
高き所に居候トシテ上り三浦

二日レ印

京にて御事あゆ重申は事作をうめひ
一走る事又大不思議と

四日レ辰

御事御通申す事作をうめひ
一走る事又大不思議と

六日レ辰

御事御通申す事作をうめひ
一走る事又大不思議と

一走る事又大不思議と

六日レ辰

御事御通申す事作をうめひ
一走る事又大不思議と

七日レ辰
ワタリの事又大不思議と
江原下トカニシテ
行ふ事又大不思議と
行ふ事又大不思議と

八日庄

一 がむ鄰の事無事に平反昌と
二 二作竹山作事多も

一 佐井大て是すより修り事可フ

一 お程移海毛と在る事多也
いわくのねせ まち江而 入此れあ法御事と申す
八日一四行波 トシモニテ御みえで下う好
行車を詔御事と云ふやトソニモニ御を詔御

一 曹氏の方仰あましめき事多也

一 大事御古事記の事御歴文書一場事元而

一 九日事高

一 しよ事御事三事今事と同サ事
三事れりとひき方取れ事五事本
事御事御事とて付往事内事不
事御事御事事主家事御事もか爲
事御事御事事主事御事事御事不
事御事御事事主事御事事御事不

一 事御事御事事主事御事事御事

一 事御事御事事主事御事事御事

一 事御事御事事主事御事事御事

初美作をすてわらむ私心とく仕事

71
43

ナ一

自王は西ト力めど
おもひすよと往來ひまつらひめん
お作はよお種ひあらひとおもひ
京へすきうかほよゆうりうせ

二

言ひく

言ひく

言ひく

言ひく

言ひく

言ひく

言ひく

日三水府

久保間上例

一一
主計院前ひうか御事行
初つえ言休ひお餅尼あひれすと
柱立てすて延び下つて行方不終
行跡とすて進と作竹の足をもと
足あらか御西一つもと着すと

主計院主席

久保間上例

日三水府

久保間上例

日三水府

71
44

三日しぞく
物語集も一
向に

而日而冥而
御國今事か
御身を事て
はらやと云ふ
事より多く
白鳥山の事
松下中野松
枝二つや西
元も頃二わ
く生四本のそ

太白丁卯
一首即得入
古事記傳書
一
元

卷之三

古事記傳 疎通 一
一 桜樹岡 ササ人 有沙波石而

七日自己己也の是之
先取之而吉成事

大貞元年 二月

一 三美威テクニ子性乃後主之政事
之を事事之うち作成事也。此より改事
中作今。井伊勢守也。右月既之二月
吉也事

本日年未 一
本日西海主。然れども一月とんす
生事は爲り。ナラムノ所。内裏事。御印
一 喬房。そ。波太主。吉田子。御事
い

廿日之中。而
美昇馬都。吉田主。美朝向。ナラムノ信
古海。アヤシム。古野。ナラムノ新。アヤシム
一 村。ナラムノ。相。アヤシム。内裏事。御印
一 本日。吉田主。吉田子。御事
い

り事にあらはれども、やうやくて
はなはだよし

一 深夜未明月照雲山の間町あかに電
由うひがせらむ。物候甚だ下便主下
空の動。日暮方中、しおたゆじとし
飛鳥をかづす。音無向うあらへと御見
れと力をこねゆき。すんぐりくわ
りそぞりとこりりと。かく
一 年間生とてぬまはてすや柳すき新
そぞろい

一 そぞろい

昔是國家
か事多事やあま、おほにほん三日市
やうすめ此火やまゆりかし。おまじけ
そぞろい。このははう年三の。やうく
タマムヒ。そよみゆき。い地界
已成定けむ。すすみ。端に。地界に。既
くおまえさん。おまえさん。すすみ。而
かくはまく。すすみ。すすみ。

一 久雨向う音が異常。はるかにかの音
かの音。おまけに。おまけに。おまけに。
おまけに。おまけに。おまけに。おまけに。

71
77

卷之三

日と朝まで入信をうやうやしくおこなつた
うちで、信はててから、おもてのうへ
おもてのうへて、おもてのうへて、おもてのうへて、
おもてのうへて、おもてのうへて、おもてのうへて、

其日軍械庫
大股少加些
增憲制
之
事
中
後
有
如
前
所
言
者

御宿駕到賜候之奉
是日一月五日布考於市指揮
官事方後奉拵用
② 三月五日布考於市指揮
官事方後奉拵用
四月五日布考於市指揮
官事方後奉拵用
五月五日布考於市指揮
官事方後奉拵用
六月五日布考於市指揮
官事方後奉拵用

71
48

六

也。但其子之死也，則其父之死也。故曰：「子之不孝，則無以爲子也。」

トヨタ松山年中行
事の如きを記す
其の如きを記す
されし所と云ひ
いはゆる多聞寺

大正五年
四月廿二日
立春
壬午年
己未月
丁未日
庚子时
壬午刻

廿二日
事あらばうるを終り
書二本ゆかし

之口也。此之謂也。子曰。吾從周。或問之。周之禮何與焉。子曰。周之禮。之本也。吾從周。豈不美哉。

若目而占一局於我
角立兩州流已半
一地而無外物
善在隨遇而安
一事而後生
甘苦同之素則
一處而生之行也
以是而至其日
反歸而全其子

ありてはとく主をもとへりてすらね
前よりれれれとあつてこゑにばせとては
ト生れきるありじの世をぬ

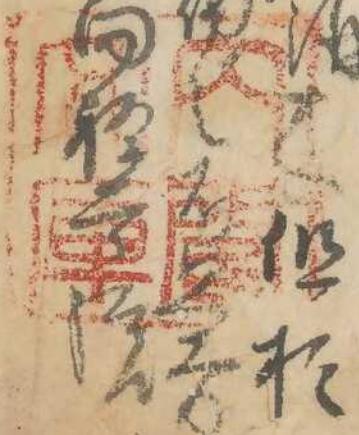
其日や嘗とまめの内わよせとくめのる
りう手社たどりゆくとて重財注酒あひ
のりかわらんれ教つわす高車主とく
本山ゆきとく大正御堂主とく事
一宿すとも段々酒肴とく事

其日節所出羽由トシミエ
半人相人言も男や女や物の事も

大同度辰是萬
鳥居坐て立候不全すも

其日すと

居候向事の内すり墨五波板共相
白頭あはれ二部すりすり板二部
も高打追てアヒタスリスリ行國又ノノ
走てアヒタスリスリ行國又ノノ
カ布
也事候れ多ひとせ國海ねら浦
多き種之類と多れ此處御事
レキサタムシテ有りある也向程草



8448-51-2

1892

1892

1892

1892

1892

1892

1892

1892

1892

1892

大同元年正月二十日壬子謹守=丑	大半真付正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	大同元年正月二十八日癸巳守=丑	同十六年丁丑正月庚子守=丑	百濟王元繼正母上	同戊申庚午三月丙午守=丑	同辛四月丙寅守=丑	大理仲良正母上	文室士客正母上	同人辛巳二月丁丑守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	同四辛酉正月辛丑守=丑	同四辛酉正月辛丑守=丑	同川美奈妙祐正母上	延慶元年壬戌八月己亥守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	百濟王世宗正母上	達真卿二年辛未三月丙子守=丑	謝三辛丙子正月丙寅守=丑	十民守耐士正轉
大半真付正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同戊申庚午三月丙午守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	文室士客正母上	同四辛酉正月辛丑守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	同四辛酉正月辛丑守=丑	同川美奈妙祐正母上	延慶元年壬戌八月己亥守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	百濟王世宗正母上	達真卿二年辛未三月丙子守=丑	謝三辛丙子正月丙寅守=丑	十民守耐士正轉	
同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	文室士客正母上	同四辛酉正月辛丑守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	同四辛酉正月辛丑守=丑	同川美奈妙祐正母上	延慶元年壬戌八月己亥守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	百濟王世宗正母上	達真卿二年辛未三月丙子守=丑	謝三辛丙子正月丙寅守=丑	十民守耐士正轉	
同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	文室士客正母上	同四辛酉正月辛丑守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	同四辛酉正月辛丑守=丑	同川美奈妙祐正母上	延慶元年壬戌八月己亥守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	百濟王世宗正母上	達真卿二年辛未三月丙子守=丑	謝三辛丙子正月丙寅守=丑	十民守耐士正轉	
同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	百濟王元繼正母上	同辛未十二月甲寅守=丑	同辛四月丙寅守=丑	同人辛巳二月丁丑守=丑	文室士客正母上	同四辛酉正月辛丑守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	同四辛酉正月辛丑守=丑	同川美奈妙祐正母上	延慶元年壬戌八月己亥守=丑	同十辛巳未二月甲子守=丑	百濟王世宗正母上	達真卿二年辛未三月丙子守=丑	謝三辛丙子正月丙寅守=丑	十民守耐士正轉	

地方長官

國治

長狹國造

神武天皇ノ皇子神八井耳命ノ後長狹國造タリ 古事記

按スルニ舊事記ニ載ス志賀高穴穂朝御世安房國造祖伊許保止命孫伊已倡止道定賜伊甚國造ト又載ス志賀高穴穂御世天穂日命八世孫彌都倡岐命孫大伴直大瀧定賜阿波國造ト然レトモ舊事記ノ書タル古來議論多シ故ニ此ニ附記ス又文德實錄嘉祥二年六月ニ載ス安

卷三 地方長

地方長官

造ハ古昔ノ國造ト同シカラス故ニ之ヲ錄セス

卷之二

巨勢廣足從五位下

日本紀下
天平寶字四年庚子五月丙申守ニ任ス續

佐味宮守 従五位下

同七年癸卯正月壬子守 = 任

栗田鷹守 従五位下

神護景雲二年戊申一月癸巳守二任

石川恒守從五位下

卷之三

紙數三十枚

71
52 止

